



今号の表紙はこの子たち！ 学生と農家を繋ぐべく日々活動！

静岡大学 農業サークル 縁農隊

(縁農隊に関する詳細は巻末をチェック！)

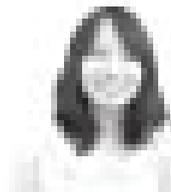
特集

その大地を知らずして静岡を語るな。

静岡の「土」を舐めたい

まだまだ片思
い中……

静岡時代の編集長は毎号変わる。今回はこの2人！



まだ片思いたい編集長
植田那美絵 (静岡大学)



さらさら土情の副編集長
森田友花 (静岡英皇学院大学)

最近いつ土に触りましたか？ 今日、私たちが大学へ向かう道も、食べた野菜も、使った器も、すべて土によって作られ、土によってそのものたらしめられています。雄大な山々に豊かな海、健康的な土壌をもつ静岡。しかし、今私は土に触ることも土を感じ語ることもできていない。

どれだけ土に触っていない人でも、かつて幼い頃土にまみれた記憶があるはず。つまり大人と子どもの狭間にいる私たちは土を知らないのではなく、かつては知っていた土を忘れてしまっているのではないのでしょうか。一見地味な土には、常にとめどなく有機体が活動し、生長と成長が繰り返されています。そんなすぐそばにある「生」を知ることで少し楽になるような気がする。夏の足音が聞こえる今だから究極的に知り尽くしたい。土ってなんだ？

野菜を育む土は生活と深く繋がっています



今号の表紙を飾った静岡大学緑農隊 隊長

渡辺 真千子さん

大学：静岡大学
学部・学科：農学部 共生バイオサイエンス学科

私の所属する「緑農隊」では、お付き合いのある農家さんのところで農作業を手伝ったり、大学付近にある畑で野菜を作ったりしています。緑農隊の活動を始めてから旅先などでも土を見るようになり、同じ静岡県内でも地域によって土の様子が違うことに気が付きました。例えば浜松の方は少し白く、富士の方は黒いですね。用宗は海が近いためか、土がさらさらしていて砂のようで驚きました。

去年家の畑で一から大根を作ったんです。耕したり畝を作ったりするのが大変でしたが、家族が「美味しい」と食べてくれたのが嬉しかったです。食べた人に喜んでもらえることが農家さんは嬉しいんだらうなと思いました。野菜を食べると土の大切さを実感します。

普段食べているほとんどの野菜は畑で育つたものですし、土は私たちの生活のどこかしらに繋がっていると思います。

大学：常葉大学
学部・学科：外国語学部 英米語学科

僕が好きなアクアリウムと土は一見関係がないように見えますが、実は土はとても重要な役割を果たしています。アクアリウムの世界では土のことを「ソイル」と呼ぶのですが、ソイルは主にバクテリアを付着させて水をきれいに保つ役割を担っています。

また、土には十分な栄養分があり、水に溶けた栄養分を水草が吸収して、さらに光合成することによって陸上と同じように育つことができますので、僕が今挑戦している、水槽の中で川の断面を切り取ったような状態を再現するためには土が必要になるのです。

それに山の土によってきれいな川の水がつけられるので、山と川は繋がっていると言えますね。土がないと死んでしまう魚もいるため、魚が住むことができる命の水を作り出すことができます。土がなければアクアリウムはできません！

土によって命の水ができるのです



常葉大学 アクアリウムクラブ 立ち上げ人!

麻村 純一さん

大学：静岡県立大学
学部・学科：食品栄養科学部 食品生命科学科

幼稚園に通っていたときは毎日泥だらけになってお山や泥だんごをつくっていたし、小学生の時は田植えをしたり、畑で野菜を育てたりしました。でも、それ以降、土とたわむれた記憶がありません。

編集長から「今回の特集は土!」と言われたとき、一番初めに思い浮かんだのは雨の日、白いスカートに付いた茶色い斑点。小さい頃はあれほどお世話になった

「土」に対して、今となっては「雨の日に飛び散って服を汚すもの」というマイナスな印象を強く抱いていたことに気づかされました。あの頃、土と楽しく遊んでいた感覚を忘れてしまっていたなんてちょっと寂しいですね。この夏はかんかん照りの太陽の下、真っ白なTシャツと短パンで土にまみれたい。汚れるなんて構わず、べっちゃべちゃになって全身で土を感じたいのです!



真つ白なTシャツと短パンで土にまみれたい!

静岡時代編集部。今年の夏は「土嬢」になる!

小池 麻友さん



土をもっと生活の中に取り入れていきたいです

山梨と静岡をつなぐワインバー店主

山田 瑞己さん

大学：静岡県立大学
学部・学科：食品栄養科学部 栄養生命科学科

私は出身地の山梨のワインと特産物を扱うワインバーを経営しています。自慢のワインも、水はけのよい山梨の土だからこそ作れる特産物の種類と土の特性は大きく関わっていると思います。

最近では土に対して汚いなどマイナスイメージを持っている若者が多くなってきたように思いますが、もっと土に触れて農業の楽しさを知ってもらいたいです。

ね。お店では月に一度、農業に関心を持ってもらうために、農家からの頂いた野菜を調理してお客様に提供するイベントを行っているので、是非お越しください。土に触れる機会は静岡に来てからずいぶん減ってしまいましたが、不思議な温かみを持つ土を、生活の中に取り入れていけたらいいなと思います。

■ Wine Cafe Route52 www.facebook.com/winecafeoute52



土壌学の専門家
静岡大学 南雲 俊之先生

土の愛し方を知りたい編集部
杉野 (左)・榎田 (右)

土はいわば「お母さん」？ 超学術的土界への誘い

土のスペシャリストに聞く！ そもそも土ってなんですか？

一見地味な土だけど、自然界のメカニズムの中でどうはたらいているのか？
静岡の土ってどうなの？ 土壌学の専門家であり土の救世的存在、
静岡大学南雲先生！ 私たちにご指南ください！

自然物であり、植物が生育可能。それが土。

——南雲先生の専門分野である土壌学的にいうと「土」はそもそもどういったものを指すのですか？

土壌学的にいうと「自然物であること」と「植物が生育している、もしくは生育可能である」という二つの条件を同時に満たすものを「土」と定義しています。

自然物というのは、水があり、植物がいる自然のなかでできたということ。たまたまそこにあつた岩石の上、川の氾濫や火山の噴火などで堆積物が積もつたところで、風化が生じ、また植物が侵入して植生が発達していく。このとき、雨が多いとか、植物の違いによって土に様々な変化が起こり、固有の土壌が作られます。

——では、砂場の砂は「砂」であって「土」とは呼べないのでしょうか？

砂場の砂は植物が生育可能なので土に分類できます。ただ、定義を厳密に適用しようとすると「植木鉢にいられた砂」というのは判断に困ることもあります。例えば、月の表面にあるものは土といえるか、考えてみてください。地球に持って帰って植木鉢に入れて、

肥料をまいて種を植えたら植物が育ちそうな気がしませんか。しかし、月にある限り植物がいないので、残念ながら「植物が生育可能か」という定義によって土壌学でいうと月には土が存在しないことになりました。

——植物が土の定義には必要不可欠なんですね。なんの変哲もないような土から植物が立派に育つことは不思議なことであり、目に見えずとも生命のうごめきのようなものを感じます。土の中で何が起きているのですか？

まず、土壌の岩石など「一次鉱物」の集合体が、雨風や岩石自身に含まれる水分の膨張などの影響を受けて風化され、鉱物自体に含まれている鉄、リン、カリウムが少しずつ溶け出します。これらの元素の多くは植物の栄養になります。土はこれらの栄養を蓄えて植物に与え、生育を助けています。

ただし、窒素は植物の生育において三大栄養素の一つで、大気中にたくさん存在しますが、植物はこの大気中に存在する窒素を自力で取り込むことは

できない。ですが土の中に、大気中の窒素ガスを植物と共生しながら取り込むことができる、ある種の微生物がいます。そのおかげで、植物は大気中の窒素を利用できるようになります。この微生物の働きを生物的窒素固定といえます。

土の性質としてもう一つ上手くできているのが排水の機能。雨が降ると土に水がしみ込んでいきますが、大雨でしみ込みきれなくなると、表面にあふれます。これは雨のとき川が茶色の濁流になる原因にもなります。でもいったん雨がやめば、すぐに重力の働きで余分な水を排水し、排水した分だけ酸素を含んだ新鮮な空気が土に入り根に届けられます。このとき全部の水を排水しないで、植物が使う分の水を残してくれる。これが土の働きです。

土は植物に水と栄養を届ける台所なのです。

——植物が育つコンディションを自然に整えてくれてるんですね。では、静岡県の土の中で違いはありますか？

静岡県にしか存在しない土というのはありません。例えば、静岡県には、山地に「褐色森林土」、丘陵地には「黒ボク土」、「赤黄色土」、川沿いの低地には「グライ土」などが分布していますが、これは全国共通です。でも見たことないでしようけど、この四つは色も形も異なるんですよ。その中でも「黒ボク土」は、世界遺産にも登録された富士山や観光名所が多い伊豆という静岡県東部に広がっていて、象徴的な土ですね。「黒ボク土」地帯は大規模な露地野菜産地になつていて、栽培されなくても根菜類など多くの野菜が栽培されます。静岡県のものは主に穴の開いた

ボールのような形をしたアロフェンという鉱物が多いタイプのもので、土に含まれる水(液相)、空気(気相)、鉱物と有機物(固相)の容積割合を百分率で示したものを「三相分布」と呼びます。一般的な土は、固相が約半分、残り半分は気相と液相で構成されています。それに対して黒ボク土は、鉱物の割合が全体の四分の一程度と少ないのが特徴。残り四分の三は液相と気相です。つまり、隙間が多いということです。粘土質の土壌だとべちゃべちゃするんだけど、黒ボク土は手触りも軽くてホクッととした感じになることが多い。おかげで植物の根が入りやすく伸びやす

黒ボク土は、手触りが軽くて「ホクッ」とした感じ



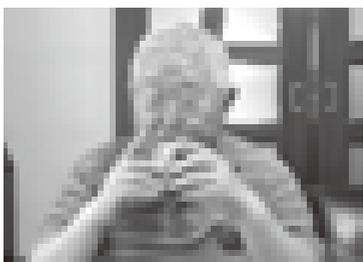
このお話をもっと深く学びたい人へこの授業！土壌園科学（静岡大学 農学部 専門科目 / 南雲 俊之先生）

これも土!

NO TSUCHI, NO LIFE. 土ラバーズに聞く 「あなたの愛する土のかたち」

土ってなんか地味……。そこに「まった」をかける三人の土愛好者、その名も土ラバーズ(勝手に命名)。さあ、あなたはどの土が好き?

土笛は、素焼用の「テラコッタ」という粘土を丸め、中をくり抜き、自分自身の感覚で歌口と指穴を開けて作ります。僕も作り続けてもう35年になります。土笛は弥生時代に作られていたことがわかっており、2000年以上前の人々が聴いていた音を現代の私達に伝える一つの物証なのです。土笛を作る際、現代の社会ではあまりない「土」という自然に触れる体験ができます。また、焼き上がるまでのわくわく感や、音が実際に出たときの喜びなど、一つの土笛が完成するまでの工程はトータルで楽しめます。短い時間で大人も子供も楽しめる、それが土笛の魅力だと思っています。



土笛研究者
菊池保朗さん

取材中、菊池さんの吹く土笛の音を聴くとお孫さんが笑顔を見せ、微笑ましい光景でした。部員全員分の土笛も頂きました!

私は理科研究部で『スーパー土だんご』を作り、子どもたちにその作り方を教える活動をしています。丈夫できれいな土だんごを作るコツは、とにかく優しく、かつ乾燥しないよう素早く丸めること。力を入れすぎるとすぐび割れてしまう上、この段階で出来栄が決まってしまうので作る時は真剣そのもの。難しいからこそ、上手く作れた時は大きな達成感を感じます。土に触れる機会の少ない大学生活の中で、土だんご作りは私に土と触れ合う貴重な機会を与えてくれます。子どもたちにも、身近にある土にもっと興味を持つてもらえたら嬉しいですね。



常葉大学理科研究部
藤田彩子さん

教育学部理科専攻三年。小学校の理科教材の開発を勉強中。子どもだけでなく大学生にも土だんごの楽しさを知って欲しいそう。

photogroundは撮影者が持ってきた撮影場所の土を顔料にし、手描きで描写して現像する写真スタジオを営業するアートプロジェクトです。描きやすい土、臭い土といった地域の土を実感できます。展覧会「めぐりアート静岡」でphotogroundを行いました。普通は問題を解決する事に価値を置きますが、解決できない状況を表現する事が私の狙い。福島原発事故で土壌汚染が深刻な問題になり、地域の関わり方が問題になっているように思います。昨今の街の写真屋さんの厳しい経営状況をなぞりながら、実在しない土の写真店の店主を演じました。



美術家
深澤孝史さん

美術家。photogroundは展覧会「めぐりアート静岡」で行われた写真店。現像代はお金ではなくダンスの披露。

「土」にまいた肥料が汚染につながる? いかに土壌を育てるか。

もう一つはリンの問題。日本の土は酸性土壌があったり、火山国のため火山灰の影響を強く受けたりしています。そうした土壌ではリンが土壌中のアルミニウムや鉄と完全に結合して、植物は利用できなくなり。そこで農作物の収穫量を上げる目的で、過去約50年間にわたりリン肥料がまかれてきました。しかし実際は、肥料として100まかれたもののうち90は土壌粒

子と結合してしまい植物にとって利用不可能なものとなる。植物の成長に役立つのは残りの10だけ。一割の効果を得るために、何十年も肥料として大量にリンがまかれ続けられたわけです。その結果、現在では、土壌に沢山のリンが溜まってしまっている。この溜まったリンから、ごく僅かずつではあるけれども、溶け出すリンが植物だけでなく環境にとつても無視できなくなってきた。この問題を、僕は水田土壌を対象に研究しています。僕の研究は、お茶畑で使われる肥料と川の汚染との関係や、リンの溜まった水田ではこれ以上リンをまく必要がないということ、現地でのモニタリングやいろいろな実験によりきちんとデータとして示し、土壌管理の正しい方向を見つけていくことを目標としています。



「お茶畑が水質汚染と関わっているとは思いませんでした。最後に、以前と比べ私たちが土と関わる機会が減っていると感じます。土と私たちの繋がりはどうなっていくのでしょうか。」

南雲 俊之先生

静岡大学 農学部 共生バイオサイエンス学科 准教授。研究分野は土壌肥学と持続可能型農業科学。土壌保全を目的とし、水田土壌に集積したリンの有効利用について主に研究されている。藤枝市にある農学部の所有する研究農場も研究拠点の一つだそう。

■このお話をもっと深く掘り下げたいひとへ南雲俊之先生からのオススメ本!
『土とはなんだろうか?』久馬一剛・京都大学学術出版会・2005.

「お茶畑が水質汚染と関わっているとは思いませんでした。最後に、以前と比べ私たちが土と関わる機会が減っていると感じます。土と私たちの繋がりはどうなっていくのでしょうか。」

編集長のひとこと

一握りの土にこんな複雑なメカニズムがあったとは! 土は自然界のソムリエですね。

その③ グライ土
その土、駿府城(周辺)にあり!

榎田 ★★★★★
最初は素っ気ない苦味がして10秒舌で転がすと深い苦味がくる。
木下 ★★★★★
粘土の味がする(食べたことはありません)。もちもちして溶けない。
野村 ☆☆☆☆☆
粘り気が強い。舌に含んだ瞬間ビリビリする。不味い(白目)

甘 : 0
苦 : 4
酸 : 2



静岡県下に分布。灰色を基調とし、青みや緑みを帯びている。地下水位が高い場所にでき、水はほぼ年中飽和状態。土壌中の微生物の働きで鉄の酸化物の還元反応が行われているため。

その④ 赤黄色土
三ヶ日みかんの影の立役者

榎田 ★☆☆☆☆
口の中でとろける。粒子は荒め。だんだん喉がいががしてきた。
木下 ☆☆☆☆☆
純度高くて、かなり無味無臭。でもはっきり言って好きな味じゃない!
野村 ★☆☆☆☆
とろけすぎて危うく食べちゃいそうになっちゃった。歯にくっつく。

甘 : 1
苦 : 2
酸 : 1



大井川以西に広く分布。名前の通り土壌は比較的明るい黄・赤色。土が含む物質の結晶化度の高さで黄・赤色が決まる。形質はごろごろした石の多い礫質の物から粘土質のものまで様々。

※土は電子レンジで殺菌するなど安全に考慮し実証しました

◎ 舐めた人

榎田 那美紀



静岡大学人文社会科
学部3年。今号の静岡時代の編集長。今春、突然「静岡の土を舐めたい」と言い出した

木下 莉那



常葉大学教育学部4年。天性のノリの良さをもつ静岡時代のムードメーカー。どちらかというと薄味派

野村 和輝



静岡大学人文社会科
学部4年。静岡時代の男子代表。こういう汚れ後ビジュアル企画には欠かせない存在

実証の果てに見たもの



土を舐めることはオススメしません。知的欲求から舐めた編集部。続きはWEBで。

知ることは、舐めること
「静岡の土、いただきます」

横にも縦にも長い静岡県。大井川と富士川で東部・中部・西部に分かれ、土も異なるそう。「土が違えば味も違うんじゃないか?」県内各地から集めた土をどんぶりに盛ってご紹介。仕込みは十分! いざ実証!

その① 黒ボク土
ビコーズふじのくに、の代表格

榎田 ★★★★★
粒子にバラエティ性があり、思い出せないけど何かの味。深い風味です。
木下 ★★★★★
とにかく甘い! 口を含むとすぐに溶けちゃう。もう食べちゃいたい!
野村 ★★★★★
薄い苦み。というかもう無味に近い。むしろもうなにも感じない。

甘 : 3
苦 : 2
酸 : 0

(5段階評価で表しています)



主に富士山麓、伊豆地域に分布。色は真っ黒から褐色。火山放出物を材料に作られ、アロフェンなど非晶質の鉄・アルミニウム鉱物を多く含むためリン酸吸着が起こりやすい。畑向き。

世界遺産のお足下。
決め手はアロフェン

その② 褐色森林土
土は平凡がスタンダード!

榎田 ★☆☆☆☆
味いはゼロ。どこかきなこの味に近い。粒子は細かく舌触りなめらか。
木下 ★☆☆☆☆
見た目は綺麗なのにしょっぱい苦い。どこか未熟で危ない臭い…。
野村 ★☆☆☆☆
土の風味や匂いが一番強い。以上。(……なんか背中痛くなってきた)

甘 : 1
苦 : 2
酸 : 1



静岡県下に分布。赤黄色土より暗い色。広葉樹林下のできる土なので落ち葉などからきた腐植物質を含む茶色の土らしい土。日本は国土の2/3を森林が占めるので大部分がこの土。

土壌界の青少年は、
きなこ味……?

書を捨てて棚田へ行こう そこは……

特集 静岡の「土」を舐めたい

土の「桃源郷」

せんがまち棚田倶楽部 堀 延弘さん
静岡大学 棚田研究会部長 山本 達郎さん
本誌編集長 榎田

土と人が共にある原風景を訪ねて

土が生きる現場を見るため、初夏の日差しがそそぐ菊川市「千榎棚田」へ。そこで出会った二人の棚田を守る案内人に聞く「農業にとって土とは？」その問いから見えたのは、想像を超えた人と生き物の営みだった。

昔のものを守る。土の力って凄い

——菊川市上倉沢にある千榎の棚田は今も多様な生き物が集う日本の原風景。植物を育む土台となる「土」は、農業やそこに棲まう生き物たちにとってどのような存在なのでしょう。千榎の棚田について教えてください。

静岡大学棚田研究会 山本さん…ここ上倉沢には江戸時代中期に10ヘクタールもの立派な棚田があり、年に五百俵ものお米がとれたようです。今はかつての棚田面積のうち3分の1が復田しています。僕は棚田研究会で上倉沢の廃田でお芋や古代米をつくっています。大学祭などで、棚田でとれた古代米の販売や古代米を使っていた焼きも販売しているんですよ。

——古代米のたい焼き！美味しそうです。それにしても棚田が折り重なる風景は圧巻ですね。

せんがまち棚田倶楽部 堀さん…上倉沢周辺は地面に平らなところがなく、食べていくためには山を切り開いて棚田を作るしかなかったんです。昔は家族が一人増えるごとに一枚田を増やすなど、棚田は人々の生活と共にありました。せんがまち棚田倶楽部では、そ

んな棚田の保全活動をしています。山をそのまま切り開いたため、一枚として同じ形はありません。だから今の農業機械を使わず、棚田が作られた頃と同じで全て手作業。土に農業などの化学肥料も使っていないので、土を舐めても問題ないぐらいです！

——そのくらい健康的な土壌なのですね！農業を一切使わない、千榎の棚田は、土の力が大きいように思います。堀さん…土に農業をまかないことは、

四百年前の戦国時代にこの棚田が切り開かれた頃から変わっていません。昭和50年代の減反政策によって、棚田は40年余り手付かずで放置されてしまうのですが、私たちが復田をすると「シャジクモ」という絶滅危惧種の藻が出てきたんです。昔のものを守る土の力は凄い。無農薬だから人が手入れしなくても、土や田が生きていたんです。僕たちが復田した時に、土が長い眠りからぼっと覚めた、そんな気がします。山本さん…この棚田はそういった絶滅危惧種が多くいるんです。僕も今、必

無農薬だから、舐めても平気なくらい土が生きている

死に覚えようとしていますが、種類が多くてなかなか敵しいです(笑)。——何百年も前の人々が見ていた景色と動植物に触れられる。初めてこの棚田を見たときに感じた「懐かしさ」の所以が分かった気がします。山本さん…僕も棚田に入ってから、千榎の棚田を初めて見たとき「すごい綺麗だな。なんだか好きだ」って思いましたね。時々お昼にこの棚田でとれた棚田米を食べさせてもらおうのですが、これがまた美味しいんですよ。堀さん…本当に美味しそうにパクパク食べてくれるよね。とはいえ、僕はお米作りのためにだけに千榎の棚田を守っているんじゃないんです。「ニホンアカガエル」や「キキョウ」などの貴重な生き物や植物、そしてこの景観を守り残していくのが仕事だと考えています。ほら、今の時期だと日本在来種「シユレーゲルアオガエル」がちょうど産卵の時期を迎えています、今も鳴き声がしていますよね。この声を聴くためだけに来る人もいますよ。

世界農業遺産の「静岡の茶草場農法」には、この千榎(せんがまち)の棚田も含まれている。せんがまち棚田倶楽部の山本理事長の「先祖が汗水流して築いた棚田が減んでしまうと、すぐ横のお墓の先祖が泣くぞ」という一言から、復田が始まったという。



陶芸家 小國 加奈さん

迷うほどに土は楽しい。 一つの器の百の物語

土がある生活を創る。陶芸家の土論

土と火が会おうことで生まれる一つの陶器。土の潜在能力を引き出す陶芸家はどんな想いで土と向き合っているのだろうか。「静岡の土でしか作れないものを作りたい」そんな陶芸家小國加奈さんにとっての、土の魅力とは。

実は主役級？
奥深い土の世界

——小國さんの作られる器からはどれも土の暖かみを感じられる、柔らかな印象を受けます。そもそも陶芸において土とはどのような役目をもっているのでしょうか？小國さんの土へのこだわりも含めて教えてください。

私が普段使う粘土は、お付き合いのある粘土屋さんから、自分の出した色や手触りに合ったものを選んで仕入れていきます。例えば粒子の細かい粘土はなめらかな手触りになりますし、程よい重みが出るんですよ。私が今使っている窯でうまく丈夫に焼き締まる土を選ぶことも大事ですし、毎日々気を遣わずに使えるタフな器にしたいですね。あとは、器を焼く前に釉薬（ゆうやく）という薬をかけてコーティングをしますが、この釉薬の種類によつて、手触りも変わるんですよ。

また、日本の食卓では、他の国よりも器を持って食べるという文化が強く根付いていますよね。「器を触る」という機会が多いからこそ、触り心地や重すぎず軽すぎない重さを大事に作っています。縁の下の力持ちのような、皆さんの生活を引き立てる、毎日



生き物が棲みつきやすい水をつくる。土は棚田の浄化装置

山本さん・棚けんで、お茶畑から棚田にかけて水を取り込む場所にピオトープを作ろうと試みているのですが、まだ成功したことがないんです。こんなに生き物がいるのにその場所だけには生き物が棲みついてくれないんです。堀さん.. そうなんだよね。僕のお茶畑は棚田のすぐ近くにあつて、良質な茶葉にする為に窒素を多くする化学肥料をまきます。その結果、溶け出した肥料成分を含んだ水が棚田に流れ込み、水を取り込む場所に生き物は棲まなくなる。そんな茶畑から出た生き物に良くない水は、棚田を一枚通ると、土が余分な窒素を吸って生き物が棲みつく綺麗な水になるんです。この棚田が一つの大きな浄化装置なんですよ。

——土と水は強く関係し合っているんですね。山本さんは棚けんに所属している、私を含めた大半の学生よりも土に触れ合っている大学生ですよ。

山本さん.. そうですね、僕も大学にいると不意に「最近棚田に行っていないな、行きたいな」と思うことがあります。

慣れない作業を全て自力で行うのは大変ですが、どの作業も楽しいんですよ。堀さん.. 一生懸命どころになりながらやつてくれています。みんな全く土に抵抗ないしびびりですよ（笑）。

——この手と土で何かを育めるということを忘れてはいけませんね。堀さんにとつて棚田の魅力とはなんですか？

堀さん.. 今の世の中には何でもあるけれど、この棚田には、何もなければ何かがあるんですよ。貴重な生き物だったり日本の原風景だったり、日本人が失くした大切なものがある。この棚田の目的はお米を売って僕らが生活をたてることではないからこそ、僕らも土と自由に交わえるんです。

山本さん.. 僕らも思いっきりわいわい騒いで楽しく作業できるし、部員のみんなも、この棚田が大好きなんです。

——お二人を見てみると、棚田が人を繋いでいるんだと実感します。私もまた棚田に遊びにきていいですか？

堀さん・山本さん.. ぜひ！棚田で待っています！（取材・文／亀山春佳）

編集長のひとこと

土が人を作り、人が土を作る
..... 私もいつか土の自覚まし時計になりたい。

山本 達郎さん

静岡大学理学部3年。棚田研究会(通称:棚けん)部長。棚けんは2009年12月に設立。NPO法人せんがまち棚田倶楽部と連携して田植え、草刈などの棚田保全活動を行っている。【しず大棚けん】www.tanada1504.net/tanaken/

■ 土コンシャス! 棚けんからのお知らせ
「あぜ道アート」6月7日(土) 18:00~20:00。雨天、翌日開催。千本のろうそくが棚田を彩る。年に一度しかみられない絶景!

堀 延弘さん

NPO 法人せんがまち棚田倶楽部 事務局長。生きものがにぎわう美しい棚田を目指し、棚田の回復と保存・維持の活動を行っている。菊川市北東部に位置する千榎は、総面積10.1ha、3000枚以上の棚田で構成された風景が広がる。

■ 日本の田風景・千榎へ行こう!
静岡県菊川市倉沢1121-1(東名相良牧之原ICから約10分。東名菊川ICから約15分。新東名島田金谷ICから約15分)



店内に併設される小國さんの作業場は、ガラス張りになっているため、外からもろくろを回す姿を見ることが出来ます。小國さんのこだわり。

写真の器が、静岡県の土を混ぜて作ったもの。静岡の土は高温に弱く早く溶け出すため、黒い斑点のような模様が自然と浮き出るのだそう。

「土の地産地消」の実 現が私の理想

使っているも飽きのこない器作りを心がけています。

——器の手触りの土台となる土選びから、繊細な工夫を重ねていらっしやるんですね。では、出身地である静岡の土を使って陶芸はされていますか？

私もまだ研究途中で100%静岡の土で作る、ということはありません。出ていないのですが、普段使う粘土に少し混ぜてみたり試行錯誤はしています。というのも、市販の粘土で陶芸をしていたとき「せつかく清水という地で陶芸をしているんだからこの地で採れた土で作りたい」と思っただけです。静岡で陶芸をする意味を考えると、静岡の土を使うことですね。

静岡の土を使うきっかけとなったのが、静岡の様々な土を使って器を実験した成果をまとめた『やぎもの実験 静岡の土（芳村俊一・宮本森立編）』という本。釉薬を使わずに静岡の土が出してくれる色を活かす陶芸のやり方、静岡の様々な土を使って実験的に焼いているその姿がとても衝撃的で、その本に刺激を受けて以来、私も

陶芸も行われていたということ。つまり、今静岡の土があまり陶芸に向いていないと思われているのも、陶器を焼く今の一般的な温度が静岡の土に適していないからなんです。だから、土に思いやりを持って寄り添って、その土地の土に適した温度で焼けばどんな土でも焼き物になると芳村俊一さんはおっしゃっています。

同じく印象的だったのが、大学で本格的に陶芸を始めた時の先生の「土を使う事の意味を考えなさい」という言葉。土を生かし、土じやないと作れないものを作りなさいという意味です。手で触れることで、私も土の特性の生かし方や土を使う意味を感じ、見つけていきたいです。

——土の力でその器の個性を出す、難しいのですが、陶芸だからその表現方法だなと感じます。

やっぱり土が主役なんですよ。そんな土は、実は何千年も何百万年というものすごく長い年月をかけて作られているんです。もしかすると人間が

奥が深すぎて、
尽くせないかも

土を生かし、土じやないと作れないものを作るといふこと

える土があればとにかくもらって研究しています。

山と海を持つ静岡県の土は、火山灰や海成土が多く含まれています。そのため焼いたとき、含まれる成分が相互作用して早く溶け、形を留めておくことができません。不純物が多い粘土を高温で焼くとぶくぶくと泡立ったり溶ける一方で、純度の高い磁器土などは高温で固く引き締まります。焼いて固まって溶けるまでの温度の幅が土の成分によって違うんですよ。でも不純物があるからこそ釉薬を使わなくても、予想外に混ざった金属の作用で、土が色を出してくれたりするんです。また、同じ釉薬を使っても、土によって焼き終わった時の色も全然違うんですよ。

——土の中の成分がそんなに強く器に影響を与えているなんて驚きです。

陶芸って、土はもちろん、火の力も使うし、水の力も使うでしょう？ つまり、自分の力というよりも自然の力を借りて焼き物はできているんです。

いつか使い尽くしてしまうかもしれない、限りある資源の一つなんですよ。陶芸家としてその問題に取り組むために、割れて使えなくなってしまう焼き物を粉砕して、もう一度粘土に戻された「リサイクル粘土」を使った器作りもしています。埋め立て処分するしかなかった焼き物を違う形に生まれ変わらせることができるんです。

私にとって土は、生かしてもらっているもの

——土は限りある資源。だからこそ土の存在を日常の中で想う時間を持つてほしいですね。最後に、小國さんにとって土とは何か教えてください。

私にとって土は「生かしてもらっているもの」ですね。自分の職業としても、自分が食べる野菜やお米などすべての食べ物や育む点でも。そんな土を扱う陶芸は、知れば知るほど本当に奥が深い。芸術の表現方法ってたくさんあるけれど、私はこれからは土一本に

一生やってもやり

そう思うと謙虚な気持ちになれるんですね。静岡の土でできた器に、静岡で採れた野菜やお米をのせて静岡の人がそれを食べる、そんな今は薄れてしまった「土の地産地消」の実現が私の理想ですね。

——土の地産地消！確かにせつかく自然豊かな静岡に住んでいるんだから、その魅力を五感で感じたいです！

実現したらすごく贅沢ですよ！私自身、大学生生活を石川県の金沢市という伝統的に焼き物が根付いている街で送ったことで、静岡に陶芸が根付いていないことを実感したんです。静岡に帰ってきた理由の一つに、静岡の人にもっと身近に気軽に陶器を使って欲しい、という想いもありました。私に限らず静岡県はあまり陶芸が盛んではないイメージを持つ人が多いかもしれないけれど、私の工房のある清水区の辺りは古墳時代には窯がいっぱいあって、昔は日本有数の窯業産地だったそうなんです。窯があるということはその土地の土を使っ

しほりたいし、奥が深すぎて一生やってもやり尽くせないかも(笑)。好きが根底にあるから、今、土と触れることが一番楽しいんです。(取材・文／三好景子)

小國 加奈さん

陶芸家。普段の器からランプまで、生活に寄り添う多種多様な作品を制作。静岡市内のカフェや料亭などでも小國さんの作る器が多く使われている。静岡市清水区の陶工房「KANa」では、小國さんの作品や器を実際に購入できるほか、陶芸体験もできるそう。

■小國加奈さんの陶工房「KANa」

住所：静岡市清水区有度坂5-16 / ☎054-347-7781
毎月1日～15日開店。16日～月末は作陶につき休業。静鉄電車「狐ヶ崎駅」より徒歩で約12分。

編集長の ひとこと

陶器に触れた瞬間、土の胎動を感じました。手のひらが生み出す土の可能性に乾杯。



上を向いて歩こう。でも、下も向いて歩こう。

この夏、土に惹かれてます

本誌編集長・榎田

発掘調査員。実は静岡大学卒業生

古牧 直久さん

土とわたしのつながりって？

太古の人はどのように土と触れ合っていたのか？ これからの土との付き合い方とは？
語らない土を語らせるべく、発掘調査員・古牧直久さんと静岡の古墳を訪れました。
古代の痕跡が映し出すのは自分の知られざるルーツなのかも。

わたしのルーツは、 土に在り？

本誌編集長 榎田（以下 榎田）：現代を生きる私たちは、農家さんが作った農作物を食べ、アスファルトの上を歩く、大半の人は土に触らなくても生活していきます。それに対して太古の人々は、土器の制作や農耕など、土と触れ合わないと生きていけなかったのでは思うのです。古牧さんは静岡県で古代の遺跡の発掘調査をされていますが、土やその出土品から当時の人の社会と土の繋がりにおいてどのようなことがわかるのでしょうか？

古牧さん…まず重要なのが土器です。縄文時代では、土器は食物を貯蔵や煮炊きを使用するなど、生活に必要不可欠な道具だったと言えますね。その一方、火焔土器という沢山の紋様が彩られている土器は、本当に実用品目的かと目を疑うほどの装飾が施されています。当時土器は生活の道具としてだけでなく、祭祀に使われる目的も担っていた可能性があるわけです。この古墳は牛王堂古墳といって、清水ICの北側に三つ並んだ古墳の三号墳。ほら、このように土器の破片も出土したんですよ。

舐めてみて、その後。

榎田 那美紀（本誌編集長／静岡大学3年）

初夏の風がそよぐ五月某日、私は藤枝のとある田んぼで、ひたすらスコップを握っていた。そう、「土」を掘っていたのである。「メートルくらい掘らないとグライ土なんて出てこないよ!」。農場の方の衝撃的な一言から、慣れないスコップと長靴で延々と田んぼを掘り返していた。ようやく出てきたひと握りのお目当ての土は、今までの土の概念をひっくり返すような粘土質で、漆黒に覆われていた。20歳、青春真っ盛りこの春、私の頭には、粉れもなく土しかなかった。

「静岡の土を舐めたい!」そんな小さな欲望からスタートした今回の企画。私は、土剥き出しの道を歩き、土にまみれて遊んだ子供の頃の今にも消えそうな記憶をつかみかかった。自分の体内に取り込むくらい土を知り尽くしてしまっていた。もしも自分がある頃と変わってしまったのなら、ありのままの今の私として土の愛し方を知りたかったのである。

掘り返した約二キロの土を抱えたバスの中、つくづく寡黙で気立ての良い土を想う。私たちがどれだけアスファルトで埋め立てようと、どれだけプラスチックの器を使おうと、どれだけ淘汰されようと、決してめ

げずに淡々と生命を生み出し植物を育み、私を生かす社会を回している土。現に今もこうして舐められるとも知らずに無抵抗にバスに乗ってくれている土。ねえ、こんなに健気な子っていますか？土をひとつまみ口に含んだ時の、その滑らかで少し荒っぽい舌触りは、静かに、でも確かに私に染み込んでいった。

企画を終えた今、私の中で一つ確信となったことがある。それは「土は私に愛されることなんて、ちっとも望んじやない」。そんな少し恐ろしいものだった。私が好きと言おうと嫌いとのおうと、どれもこれも土にとってはどうでもいいことで、目立つこともちやほやされることも、土は望んじやないのだ。陶芸家小國加奈さんの工房で魔法のように器になってゆく土を見たとき、私は粉れもなくその中に「陶芸」を見ていた。静岡市文化財課の古牧さんと清水の牛王堂古墳を歩いた日、私はそこに「古代の人の姿」を見ていた。私は土を通してたくさんの方の姿を見ることができた。私が出会った土の生み出した皆さんのものを。いやむしろ私は、土を通してそんな土の生み出す数え切れない二次的産物を見ることしかできなくて、土それ自体を見

ることは不可能なのだ。私はひたすら土の影を追うことしかできないのだ。静岡の土を追い求めるうちに、土は惚れ惚れするほど鮮やかに、私の手から逃げていった。土を究極的に知りたくて土を舐めた私の頭の中には、「土」という中身の無い空虚な言葉だけが強く残り、私は今土を「陶芸」や「古代の人の姿」や「情報」や「農業」、そんな二次的な様相でしか語る事ができない。うーん、果たして、私は土を知れたのか？

それでも私は、そんな土が残っていてくれたおとしものを一つ一つ丹念に拾い集めていきたいのだ。豊かな水も農作物も、土器も生き物も人の営みも、土とはなんだ？という問いも。どれも人と土の間柄が生んだ数え切れない新たな形である。何も言わずにひたすら生み出された土からの贈り物、それをひたすら手のひらの中で温め続けたいのだ。

そんなこと言っておいて私は、一ヶ月後には慌ただしい日々の中で土のことをすっかり忘れてしまっているかもしれない。でも、それでいいのだ。今の私ならばしっかりと。私が生き続ける限り、土は確かに私の足元に、私の体内に息づいていると。



全長77.6mもある午王堂山古墳。古牧さんの案内のもと、実際に歩きながら古墳にまつわる貴重なお話を聞くことができました。



このお話をもっと深く学びたい人へこの授業「考古学概論」(静岡大学 人文社会科学部 専門科目/篠原和夫先生)

土に埋もれたかつての痕跡。そこから自分のルーツが見えてくる

榎田「こんな小さな破片となつて出てくるんですね！縄文時代や弥生時代に、人はどのように土器を作り上げていたのでしょうか？」

古牧さん「まず縄文時代や弥生時代は、まだ土器を高温で焼くための技術が発達してなくて、その頃は粘土で形作った土器の上に木くずなどの燃えるものを土器に覆いかぶせ、周りで火を焚く、「野焼き」と呼ばれる方法で焼かれました。土器はオレンジっぽい褐色系になります。古墳時代に窯の技術が大陸から伝わったことで土器の焼成温度が上がって、「須恵器」と呼ばれる土器が作られます。高温で焼かれた「須恵器」は、より強度が保たれて丈夫で、土器の色が鼠色なんです。

榎田「この小さな破片からこんなにもたくさん情報が出てくるんですね。」

古牧さん「集落や墓、土器を造った窯などが発掘されると、その土器の粒子や形で作られた時代がわかるんです。地域や時代によって様々な特徴があつて、それらを比べることによって土器の変遷がわかります。土の粒子とか材質によって重要で、静岡の土器と他の地域の土器をみると形は同じでも材質は全然違うことがわかる。地域ごとに土が含む鉱物も違うから、触っただけで「これは静岡の土器だ」とわかることもあるんですよ。」

榎田「同じ土器でも地域性が出るなんて、改めて土の多様性に驚かされます。古牧さん「ある窯の拠点では、沢山作られた土器を他の地域へ流通させていたこともわかつたんです。例えば静岡県では、古墳時代に浜松の湖西に窯があつたので、その窯で作られたであろう須恵器が静岡市の方で発掘されました。静岡県では瓦を焼いていた窯も見つかつているんです。窯が発掘されることは、近くにいい粘土がとれる場所があるってことなんです。」

榎田「山がちな静岡県で採れる土は火山灰など不純物が多く、焼くとすぐ粘土が溶けてしまつて静岡は陶芸に向きだと言いますが、土器にいい粘土が採れる地なんですね。縄文から弥生、古墳時代へと土器を焼く技術の進歩を受け継いだから今の陶芸の技術を生んでいるような気がします。」

その他、太古の人々の土にまつわる生活の手がかりはありますか？

古牧さん「土に埋もれた水田などの農業の跡も考古学的に重要な昔の遺跡の痕跡です。昔安倍川の洪水で流れてきた堆積物、つまり土によって、高い所と低い所ができたんです。高い所は水捌けが良く生活するのに適し、低い所は水が豊かなので、人々はそこで田んぼや農業を始めたと言われています。」

榎田「天災で地形が形成される中で人は農業地帯を整えていったんですね。古牧さん「そう。洪水が治まつた後も人々は生活するのですが、土が積もつて地形が変わり、かつて住んでいた集落は埋もれまいます。静岡で有名な登呂遺跡は、集落と田んぼが近くにある状態で発掘されたんです。何千年も前に起こつた安倍川の洪水で積もつた土に埋もれた、家の柱の穴や、生活水を流していた溝などごく一部が出土しました。僕は土によってパツクされたかつての住民の痕跡を発掘し、調査によって当時の生活を解明していきたい」

榎田「山がちな静岡県で採れる土は火山灰など不純物が多く、焼くとすぐ粘土が溶けてしまつて静岡は陶芸に向きだと言いますが、土器にいい粘土が採れる地なんですね。縄文から弥生、古墳時代へと土器を焼く技術の進歩を受け継いだから今の陶芸の技術を生んでいるような気がします。」

す。時には泥だらけになりながらね。

榎田「治水されていない当時の安倍川が人民の生活に与える影響は絶大だったのでですね。そんな人の営みの最後にあるのが死だと思んです。かつてはお墓である古墳自体が土で作られ、人は土の中に埋葬される、この事から人は土に還るものなんじゃないかと思つたんです。そんな土と人の密接な間柄を感じるからこそ、今土と私の間に距離感があることが苦しいのです。」

古牧さん「でも僕は結局今と縄文、弥生などはるか昔とは、そんなにかけ離れたものじゃないと思うんですよ。今使われている技術や物は昔から使われていたりするわけだし、アスファルトの下にも土は確かにあるんだから。榎田「私にはその想像力がないのかも知れませんが！昔は古墳を使いどんな埋葬方法をとっていたのですか？」

古牧さん「弥生時代の代表的な墳墓である方形周溝墓は穴を掘つて土の中に遺体を埋めていたようです。仏教が入ってくる以前は土葬が一般的でした。」

た。そのまま土

の中に遺体を入れる方式や、土の中に一度ぐくつた人の遺体を入れ、骨になつたものを取り出して再葬する、このどちらかが行なわれていたようですよ。このような面を総合すると、土に還るといえるかもしれませんね。」

榎田「なるほど。発掘調査員として土に触れていらつしやる古牧さんは、これから土とどう向き合いたいとお考えですか？」

古牧さん「そうですね、埋没した土も同じ土なのに酸化した部分だけ色が変わつていたりしています。そんなとんだん堆積した土の中にある遺物は真空



時には泥だらけになりながら、遺跡を発掘するため日夜奮闘中の古牧さん。

状態だから、腐食せずに保存できるんです。僕らが発掘調査で掘り起こすことで酸化や腐食を進ませしてしまうのも事実。土を掘り起こすことで分かること、失われるもの、両方あるんですよ。だからこそ少しの発掘で最大限の情報

を得たい。洪水で流れてきた土の埋没過程のストーリーや、土の中に含まれている土器をみてその時代の背景や歴史といった物語を探るのは楽しいし、その時まで謎になっていたものが明らかにするのはロマンを感じますよ。

榎田「はるか昔の人々の土との関わりが私たちに影響を与えるように、私

土が語る当時の時代背景や歴史。ロマンを感じますよね

編集長のひとこと

太古の昔、人々が創り受け継いだ土のストーリー。今度は私たちが紡ごう。

古牧 直久さん

静岡市文化財課 職員。発掘調査員として、日々発掘をし遺跡に眠っている謎を解き明かしている。静岡大学人文学部卒業。学生時代は剣道部に所属し、今も大学時代の恩師に会うために大学へ足を運ぶこともあるという。

■このお話をもっと深く掘り下げたいひとへ古牧直久さんからのオススメ本！『静岡清水平野の古墳時代 新出土品にみるまつりくら』静岡市登呂博物館.1990

ちの土との関わりも遠い未来の人たちに繋がっていくのかもしれないね。古牧さん「土を観察し昔の人の生活を想像することで自分のルーツが見える。それが発掘の面白ところですよ。発掘掘りに「今日も土で泥だらけだな」って自分の爪をしみじみ見えていますね。(取材・文/漆畑友紀)